

させず、沖縄戦の様相は相当変化を来たしたことでしよう。

また、沖縄玉砕の時期は終戦間際まで延引出来たろうし、あるいは終戦までも……。と憶測するむきもあらう。その反面、第九師団玉砕の悲劇や官民のさらなる犠牲も予想される。仮説の上の推測は別として、幸運の第九師団の編成は次の通りである。

第九師団 金沢編成 終戦時駐地 台湾新竹。

歩兵第七連隊（金沢） 武一五二四部隊、

歩兵第十九連隊（敦賀） 武一五二八、

歩兵第三十五連隊（富山） 武一五三三、

山砲兵第九連隊 武一五四六、

工兵第九連隊 武一五五九、

輜重兵第九連隊 武一五六四、

第九師団通信隊 武一五六〇、

同兵器勤務隊 武一五六八、

同第一野戦病院 一五八二、同第二野戦病院 一五九五、同第四野戦病院 一五九五、同制毒隊 一五三七

部隊

## 千島・松輪島戦記

福島県

加藤 玖市

―軍隊入隊時の御家族の状況はどのようでした。

若宮村字大江に住み父母と妹六人と妻（令状が来て結婚）の十人家族でした。

―入隊は何時で、何部隊でしたか。

昭和十七年七月末日に召集令状が来て、補充兵として、若松第二十九連隊に八月一日入隊致しました。親類・友人・近所の人達から盛大に見送られました。

―奥さんには、どのように言って、出征されましたか。

妻には「留守を宜敷く頼む」と言い、「体に気をつけて頑張つて呉れ」と申しました。

―入隊直後の教育・生活はどうでしたか。

当初一カ月は歩兵科の教育で、一カ月で検閲を受けるといので非常に厳しかったと思います。私の召集

令状に衛生兵と記入されていて、それから三ヵ月間は隣の若松陸軍病院に衛生教育の通習に行きました。人員は五〇名でした。勿論、一人前の衛生兵になるには学科に実習に厳しく指導されました。

―病院勤務について、少し話して下さい。

病院には一年余り勤務致しましたが、軍隊と申しましても看護婦さんがおりますので、風紀問題が厳しく、また外来者の出入りも多く、初年兵は特別厳格に指導されました。

―北方派遣と聞きましたが、何日、何処方面に出動されたのでしょうか。

昭和十九年二月十一日（紀元節）、命令が下り、北方派遣軍編成のため、仙台第二十二部隊に集合、第四十二師団第一野戦病院に転属を命ぜられ、勲第一一九一三部隊となった訳です。編成も終わり、二月十九日極秘の中に仙台を出発致しました。

―第一野病の人員と兵隊の年齢層は。

部隊長以下一八〇名位だったと思います、年齢は三十歳以上の老兵が多くて、私は一番若い兵隊でした。

―出港は何処からされました。

青森港より連絡船に乗り、函館上陸、再度乗車、一路小樽市に向け出発しました。二月二十一日、小樽に到着、分散して民宿し、二十五日までに船の積み込み作業を実施しました。さすが北海道は寒く作業は厳しいものでした。然し作業を終わって宿に帰り暖かい暖炉の側で、おいしいビールやボタモチを戴いたら、一度に疲れも寒さも忘れ、暖かい人の情けに泣かされました。あの食糧不足の時に、このような御馳走をよく戴きましたことは、今でも忘れることが出来ません。

―小樽出港と船団等の状況はどのようでした。

二月二十六日、いよいよ「良洋丸」八、〇〇〇トン級の輸送船に乗り出港しました。何処の島へ行くのやら、船内は四層に作られ歩行も出来ない程狭かったのです。途中大湊港に寄港しました。二十八日「赤石丸」と一緒に護衛艦「那智」に付き添われ、千島に向けて出航しました、北の海はドス黒く不気味でした。

私は船が初めてなので、荒波にもまれ酔って、甲板で大の字になってしまいました。三月三日の晩十一時頃、

突然「ドオン」という音がして、一斉に立ち上がり  
ました。魚雷攻撃だと思いました。隣を航行中の「赤  
石丸丸」がやられて轟沈したそうです。後で聞いたこ  
とですが、「日連丸」も敵潜水艦にやられ、二、六〇  
〇人が尊い生命を亡くされたそうです。若松陸軍病院  
からも軍医や戦友が乗っていた筈なのにお気の毒でし  
た。

―松輪島には何日到着されましたか。

三月五日、漸く目的の島松輪島に到着して、ホット  
一安心致しました。然し一難去つてまた一難、こんど  
は海が大荒れで上陸不可能となり、また船の中に閉じ  
込められました。夜八時頃、遂に船が流され岩礁に乗  
り上げ、船底に穴があき浸水して来ました。一斉に甲  
板上がり待機しました。幸い船は沈没しないことが  
報告され安心しました。然し軍旗は松輪島からの決死  
隊員により無事松輪島に上陸しました。戦争は乗船の  
時から始まり、次々と撃沈される戦況を見て、先行き  
が不安でした。

一晚荒波にさらされ、外套は船から噴出した重油で

ベトベト、顔も手足も真っ黒でした。朝になって一応  
風も少し治まりましたが、まだ本島には上陸出来ず、  
無人島の小さな磐城島に上陸しました。食糧もなく設  
備もなく、一面雪野原でした。腹がへり、どうにも致  
し方なく、コンブをかじり、雪を食べました。下痢を  
起し、足をすべらして波にさらわれて死亡した者もい  
たそうです。これが戦争というものかと、空しさを感じ  
させられました。十日以上もいて、本島から届け  
られた「ムスビ」も二日に一度、三日に一度でした。  
飛行機からの投下は海に落ちた患者食でした。

―松輪島への上陸は何日でしたか。

向こうの松輪島に上陸したのは十四日目頃で、髪は  
伸び、髭はぼうぼうの山賊みたいでした。先に上陸し  
ていた戦友に笑われ、羊羹を一本戴いた時は涙の出る  
程有難かった。あの磐城島で腹がへった時、小樽で御  
馳走になった「ボタモチ」のあの美味さを思い出し、  
また涙が流れました。

私達は漸くにして目的地松輪島に上陸した訳です  
が、この島は北はホロムシロ、南は北海道との丁度中

間にあり、船舶・飛行機の給油場所として軍事上重要な島である事を教えられました。野戦病院もそれぞれ科目毎に幕舎を建て、部署に就いた訳です。私は本部勤務と決まり、全員秋元曹長以下一三人程でした。野戦病院の総人員は病院長以下一八〇名でした。勿論、輜重隊も含めてです。そして三十歳以上の召集兵が多く私達は一番若い兵隊でした。

―千島列島の守備隊の状況は如何でした。

守備陣形は第一守備隊は北千島で一個師団、第二守備隊は松輪・ウループ・エトロフなど中千島方面で半個師団、第三守備隊は南千島で半個師団です。総司令官は寺倉正三閣下でした。

―松輪島の状況は如何でしたか。

松輪島は、三里四方の絶界の孤島です。中央山頂部は標高一、四八五メートルの芙蓉山で、煙棚引く活火山で、何時噴火するやも解りません。島全体が火山礫で出来ている裸島です。樹木は麓の方にハンの木が生えていて、これが冬期間に欠くことの出来ない燃料でした。なお島の守備隊は歩兵第一五八連隊（新発田）

砲兵一個大隊、工兵一個中隊、輜重一個中隊、戦車隊・航空隊・船舶工兵・海軍白砲が有り、総兵力七、六〇〇名位でした。

敵は私達の上陸を知って、直ちに空襲に入りました。毎晩決まった時間に十一時頃から午前二時頃までの一番眠い時間帯にB24爆撃機が一機か二機飛来して、照明弾を投下し、一面昼のように明るくなった所に爆弾を投下するが、高高度からなので海に落ちて被害はありませんでした。然し陣地も出来ず、雪のタコツポに入って空を眺めていたが、毎晩なので神経衰弱になり参ってしまいました。でもあまり長く続かなくてたすかりました。

―これから島内における日常のことを、お話しして下さい。

寒波が去って少し暖かくなり出して感じましたことは、水がないことでした。炊事に使用する水は海岸近くにある井戸まで行って、乾燥野菜の空き缶に入れ、二人でかついで一日何回か汲んで来なければならぬことでした。補助水を作るために、積もった雪を谷間

に集め、上から土を覆って保存し、一番坂下の処に空き缶を置いて溶けた水を溜めて使用しました。誠に水の大切さとか価値の高さということを知らされませんでした。火山礫土のため井戸は駄目、川もなく魚も取れない。

そのような中でも鮭だけは十分に食べられると思っ  
ていましたが、あてがはずれました。しかしこんぶは  
毎食、食べさせられました。炊事で使用する野菜は全  
部乾燥野菜なので、自活班を作りまして平地を開墾し、  
赤カブ・馬鈴薯などを栽培してビタミンB・Cの補給  
をしました。これも夏の期間の僅かな時期で、大自然  
との戦でした。

六月頃になると一寸先も見えない霧（ガス）に悩ま  
されます。常時、外被着用です。小雨の降る如く濡れ  
ます。その故か肺関係の患者が続出しました。

六月十二日夜中に突然「ドカン」という音がして目  
覚めました。空襲でなく「艦砲射撃」と誰かが叫んだ。  
夜の静寂を破って耳をつんざくような砲撃です。巡洋  
艦や駆逐艦合わせて一〇隻位だ。一寸先の見えない霧

の中から間断なく発砲される。こちらはまだ陣地も出  
来ていないから逃げ場を失い、土塀作りのタコツポに  
身を寄せて、ジツト終わるのを待ちました。

飛行場は真先にやられ、既に火災を起して八機と格  
納庫二棟は全滅しました。味方は砲一発の応戦も出来  
ませんでした。だんだん自分達の周辺にも至近弾が落  
下し始めました。この状況は、さながら百雷が一時に  
落下したのと同じで、耳がつんざかれるようでした。  
約三十分位砲撃を受けたが幸い無事でした。夜が明け  
て見ると一面砲弾の破片で身振るいしました。その破  
片も鋭利な刃物のようです。一寸さわると切れるよう  
です。この不気味な物が当たっていれば、どんな処でも  
真二つに切り裂いていたでしょう。朝になっても友軍  
の砲弾の野積み場所が命中弾を受け、それが誘発して  
飛んでいる。相当の被害を受けたようでした。これが  
戦争か、負戦は口惜しい、米軍の科学物量に完全にや  
られたと思いました。

一病院も戦闘準備で大変でしたでしょう。  
病院にも負傷者が運ばれて忙しくなりました。それ

から敵襲に備えて直ちに山に横穴を掘り始めました。

幸い元炭坑にいた技術者がおり、その人の指揮で工事は進みました。各科から使役が出て一生懸命頑張り、F字型の深い穴を第二、第三と作り防備をしました。

終戦まで七回も砲撃を受け、一時は二晩続く攻撃を受けました。敵の上陸かと思ひ、甲号作戦命令が出され、この横穴に三日分の食糧を確保して戦闘に備えました。しかし幸にして敵の上陸は免れ生命は助かりました。あの砲撃のすさまじさでは手も足も出ないでしょう。海岸線の防備は全滅、各種砲は全部使用不能、ただ肉弾戦あるのみです。横穴に立てこもっても火炎放射器でやられれば一溜りもなく、大和魂で戦えなどと語っても始まらない話です。他の戦場の玉砕の様子が理解出来ました。

六月頃に輸送船が三隻入港し、八時頃上陸開始しましたが、その直後突然「ゴォーン」と音がしました。驚いて見ると、今いた船が黒煙を上げて半分沈みかけていました。続いてまた一発、別の船がやられました。目の前で二隻の船が撃沈させられました。敵の潜水艦

が悠々と浮上して、霧の中に姿を消しました。味方も砲撃をしましたが一発も当たらない。

また、その頃飛行機は三機ありましたが霧のため飛び立てません。潜水艦の去った後、霧が晴れたのをみて飛び立ちましたがすでに潜水艦の姿はありませんでした。くやしがつても後の祭でした。

船から海へ飛び込んだ兵隊を船舶工兵隊が上陸用舟艇で救助に行き百名程助けました。この海は六月でも水の水でどうにも生きていられない。その上海藻が身体にカラミ動けないそうです。病院に運ばれて来て救助された者は衛生兵に抱きついて泣いていました。

いよいよ戦況も悪化し、南方も次々と玉砕し、沖縄も破れ、東京も空襲され、広島、長崎にも原子爆弾が投下され、本土も焼野原と化して、本土決戦が叫ばれるようになった。我々千島部隊も三分の二は北海道に引き揚げ、残余の部隊で守備作戦を命ぜられました。

六月に先遣隊の一部が発射しました。しかし船が少なくて行動出来ません。鉄船は全くなく資材を積んだ一〇〇トン級のポンポン船三〇隻が根室を出港、八月

に松輪島に到着しました。途中、敵潜水艦の浮上攻撃で七隻が沈没し、二三隻が入港して来ました。貨物を揚陸して、八月十五日私達は乗船しました。十二時に天皇陛下の玉音放送があるというので、隊長が上陸して「日本は無条件降伏した」のお言葉を聴かれ、これを私達に発表されました。

まさかとは思っていましたが、やはり敗戦という目じめなことになってしまいました。

―終戦の放送、敗戦の伝達は日本国民全部が、まして外地にあつた者は涙を流しながら聴きました。

人それぞれに受け止め、感無量でした。

船中で秘密書類を全部焼却しました。海上で敵の軍艦や潜水艦に拿捕され捕虜になつても決して抵抗してはならないと、強く隊長から注意を受け、北海道に向けて一路進行しました。途中ウルフ島から患者数人を乗せて八月二十日に無事根室港に入港し検疫を受けて、一年振りに北海道の土を踏みました。

一週間程根室におり、その後列車で第四十二師団集結場所の稚内へ行きました。遙か海上遠く樺太が見え

ていました。全員集結して諸手続が完了し、九月十二日召集解除となり、一路内地に向かつて復員列車は走りました。

函館から連絡船に乗って海上に出ましたがすぐに、敵艦に停船命令をかけられ、此処まで来て捕虜になるのかと思うと残念至極でした。無事航行を許されました。青森に着いてホットしました。この時初めて敵兵を見ました。自動小銃を、こちらに向けて威嚇している姿を見た時はゾットしました。

仙台も市街は焼野原でした。敗戦の姿を見ながら一路故郷へ、しかし敗残兵の姿を見られたくないので夜の最終列車にて帰りましたが、駅には妹達が出迎えに来てくれており驚きました。一列車早く隣村の先輩の方が(第二野病)帰って知らせたそうでした。

三年二ヵ月振りに故郷の土を踏み、空気を吸って、もう大丈夫と思いました。そして家族みんなの元気な姿を見て喜び合いました。

―長時間にわたり、有難う御座いました。いつまでもお元気で活躍して下さい。